

地下歩行者空間の整備に関する一考察

～ 二階建地下街の可能性 ～

名古屋大学工学部土木工学科 学生会員 ○井上 雄介
 名古屋大学大学院工学研究科教授 フェロー 西 淳二
 名古屋大学大学院工学研究科助手 正会員 清木 隆文

1. はじめに

現在まで日本の都市部には多くの地下街が建設されており、大小含めて約 80 カ所の地下街が存在している。昭和 30 年代後半から 40 年代にかけて地下街の建設ラッシュが起こったが、その後の事故の影響などから地下街の安全性に対する不安の声が起こり、その結果、「地下街の取扱いについて」と「地下街に関する基本方針について」という通達が発せられ、それにより地下街の建設に関して大変厳しい基準が設けられた。そのためそれ以降地下街新設のテンポは著しく低下した。

しかし近年、中心市街地の都市機能の集中、及び高密度化に対する安全な歩行者空間の整備、及び市街地再開発における地上と地下の一体的整備による都市機能の充実といった面から地下街整備が見直されるようになった。そして現在では防災面、歩行者環境面の向上により、大変素晴らしく、また大規模な地下街が建設されるようになった。このようにこれからの地下街建設は、大規模化、高質空間化の方向で広がっていくことが想定される。しかし「地下街に関する基本方針」では地下街の階層は一層に限るとされ、現在存在している地下街は全て一層である。そのため一層という範囲の中でしか環境の向上は期待できず、空間の広がりといった面では制約されているのが現状である。そこで本論文では、地下街に関する規制の緩和がなされたという仮定のもと、二階建地下街ができた場合に現在の一層の地下街と比較し、どのようなメリットやデメリットがあるかを歩行者環境面、防災面、コスト面から分析することを目的とする。

2. 地下街の現状

(1) 歩行者環境面

平成元年度に行われた栄地下街のアンケート調査¹⁾の結果から得られた歩行者が感じた地下街の不満点および望ましい地下通路を表 1、表 2 に示す。

表 1. 地下街の不満点

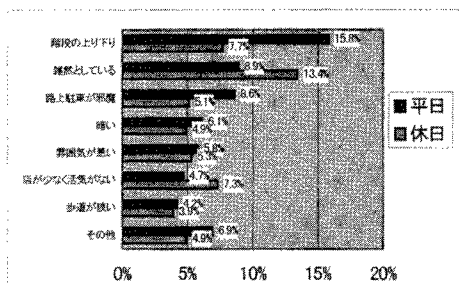
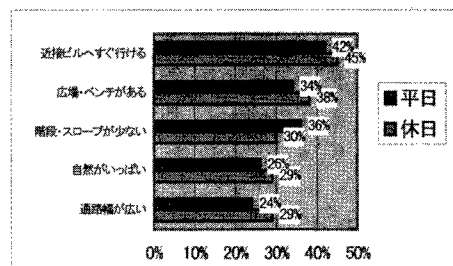


表 2. 望ましい地下通路(上位 5 つ)



そして、多様な目的の歩行者の実態データの分析から、地下歩行者空間の望ましい条件について以下の4点があげられている。

- i) 地下歩行空間のレベルが統一されること
- ii) 駅を中心として目的地との最短ルートになること
- iii) 歩行密度としてゆったりした余裕の空間であること
- iv) 自由目的客に快適と感じさせる雰囲気をつくること

(2) コスト面

最近の地下街の大規模化、高質空間化により、地下街の建設費は大変高くなってきている。さらに「地下街に対する基本方針」により店舗面積割合が低く抑えられているため、店舗から得られる保証金や家賃収入が抑えられ、当初の資金として、借入金に頼らざるを得なくなっている。このため、資金計画に占める借入金の割合が増加しており、それが地下街経営上の累積赤字解消を困難にさせる要因となっている。2)

(3) 防災面

地下街規制の最大の要因となったのが、地下街の安全性の確保が地上に比較して大変難しいという防災面における理由であった。しかし最近、防災技術及び防災システムの向上によりかなり安全性の高い地下街が建設されている。しかし地下という閉鎖空間においては心理的な不安感がうまれるため、その対応策がかなり重要であると考えられる。

3. 二階建地下街について

(1) イートンセンター

カナダのトロントにある国内でも最大規模のデパートであるイートンセンターの中心施設は地下2階、地上3階、長さ260mの大きなショッピングモールになっている。天井はガラス張り、モール空間には噴水や樹木が設けられ大変アメニティーの高い地下街となっている。

(2) 二階建地下街の特性

地下街が二階建てになることによって次のような特性が考えられる。

- i) 上方への空間の広がりによる心理的圧迫の軽減
- ii) 上下移動の増加
- iii) 店舗数の増加
- iv) 全体的な建設コストの増大

これらの特性を地下街の現状の問題点に当てはめてみると、i)は歩行者環境面だけでなく、防災面についても何らかの効果が見られると思われる。ii)については歩行者にとって最も不満な点である。iii)については歩行者にとっては魅力的な空間が形成され、さらにiv)のコストの増大を打ち消す効果も考えられる。

4. おわりに

先に述べられた特性のもと、二階建地下街のモデルを作成し、一層の地下街のものと比較し、それによって導かれたメリット、デメリットを講演で発表する。

参考文献

- 1) 名古屋市：栄地下街アンケート調査、1989
- 2) 都市地下空間活用研究会：地下空間記念ワークショップテキスト、1996